帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み

福田正恒　木村真冬　オーリ・リチャ　櫻井陽子　古市由美子
マグダレナ・ヴァシレヴァ　守谷智美

昨年度、お茶の水女子大学附属中学校と同大学大学院日本語教育コースが連携してプロジェクトを作り、お茶の水女子大学附属中学校第１学年帰国子女教育学級（この学級は帰国生だけを集めた定員15人の特別学級）において、合計14回の社会科と英語科の合同授業を行った。ここでは、第１にこのプロジェクトの目的について、第２にプロジェクトの組織について、第３に実践した授業内容及び方法について、最後にこのプロジェクトで実施したことの成果と今後の課題について報告する。

１．プロジェクトの目的

このプロジェクトの最大の目的は、帰国生が海外で獲得してきた言語能力や身につけてきた文化を保持・伸長させながら、さらに新たなものを積み重ねさせることにある。換言すれば、２つの言語・２つの文化を併せ持つバイリンガル・バイカルチュラルな生徒を育成することである。附属中学校の昨年度の帰国生は、英語圏からの帰国がほとんどで滞在年数も長く、英語が母語に近かったり、日本語より強いか同等という生徒が大半を占めていた。こうした生徒の獲得言語、即ち英語の「学習言語」としての保持・伸長を図ることが合同授業の目的である。従来の帰国子女教育の主なねらいは、帰国生に、海外生活に起因する学習の遅れを如何に早く回復させ、如何にスムーズに日本の社会に適応させるかであった。従って、このプロジェクトの試みは、帰国子女教育の新たな可能性を模索すると共に、将来的に予想される外国人生徒受け入れの展望を切り開くと考えられる。

２．プロジェクトの組織

本プロジェクトは、［資料１］のように附属中学校の社会科教員１名、英語科教員１名、大学院日本語教育専攻の大学教員１名、院生６名（この中にはインドとブルガリアからの２名の留学生も含まれている）の合計９名で構成されている。さらに、英語科の非常勤教員であるALTや大学に在籍する留学生などの協力により、できるだけネットワークの裾野を広げる努力を行った。バイリンガル・バイカルチュラルを目指した授業を行うために、ネットワークにおけるそれぞれのメンバーの役割は［資料１］のとおりである。大学教員・中学校教員の専門的な知識や経験を基に、基本的な授業の方針を全員で確認し、情報を共有する会合を多く持った。社会科教員がカリキュラムを作成し、そのカリキュラムから院生が教案を作成し、英語科教員と共にティームティーチングで英語で授業を実践した。その後、社会科教員による日本語での地理の授業が行われた。それぞれの役割を分担したが、授業方針は確認済みなので、社会科、英語科、院生の授業の方向性を一つにすることができた。また、英語科教員からは、帰国生とかかわってきた経験や個々の生徒について、社会科教員からは地理の授業における生徒の反応や学習効果などについてのフィードバックがあり、生徒の様子や学習状況を把握し情報を共有した。

3．合同授業の方法及び内容

(1) 理論的な背景

Cummins（1984、1996）は、母語が第２言語の読み書き能力や認知面の発達の基礎をなしており、母語と第２言語は相互に依存しているため、第２言語の「学習言語」の発達のためには、母語の能力が重要であると指摘している。小学校生活のほとんどを海外で過ごした帰国生にとって、個人差はあるものの、獲得言語は母語に近い役割を担っていると考えられる。帰国子女教育の「加算的バイリンガル教育」は、海外で獲得してきた言語を使う機会をできるだけ設け、しかも獲得言語を「学習言語」として有効利用することを目指すものである。獲得言語は、帰国生がこれまで海外の学校で学んできた様々な概念、用語などがスキーマとして形成されているため、これを利用した上で、教科教育と日本語教育を統合することが望まれる。獲得言語で授業を行うことは、次のようなメリットが考えられる。

① 獲得言語の使用機会が増えることによって、獲得言語の保持・伸長ができる。
② 獲得言語のスキーマを利用し、教科内容が理解しやすくなる。
③ 教科内容が理解できれば、日本語の読み書き能力や認知面の発達を促すと考えられる。

(2) 英語による教科教育（資料２　カリキュラム参照）

合同授業では、生徒の大多数が英語圏からの帰国だったため、英語を使って地理(世界地理)の授業を行った。まず、英語で地理に関する概念・キーワードを導入し、地理の教科の知識を得る。次に、「英語地理」の内容を引き継いだ「日本語地理」の授業を行い、英語で理解した概念と日本語を結びつける。つまり、「英語・教科・日本語」の相互育成を通した英語保持、教科学習、日本語習得を目指した。「英語地理」の授業は二部構成をとり、例えば、中国(第７回目)についての授業では、前半に英語で中国を学ぶ上で重要な概念である“communism”（“共産主義”）をクイズ形式で教えた。後半は、ブルガリアの留学生が“communism”（“共産主義”）国家から“democracy”（“民主主義”）国家に移行した中での体験を通してその違いを話し、それをもとに内容把握確認のためのタスクを行い、生徒にそれぞれ感じたこと、考えたことをエッセイとしてまとめさせることで、“communism”に関する理解を深めた。さらに、英語でinputするだけでなく、英語で書かれた資料をもとに話し合ったり、英語でエッセイを書いたりするoutputも各自のレベルに合わせて行った。その際、生徒の認知面を刺激するように工夫した。その後「日本語地理」で中国の政策について学ぶと、すでに重要な概念が英語で理解できているので、日本語の学習内容が理解しやすく、英語と日本語が相互補完的になるものと考えた。

(3) 地理の教科の選択

地理という教科は、数学や理科などと違って、日本語の依存度が高いこと、教科としての専門的な用語が多いこと、生徒の滞在国によっては未習の領域があることが予想される。特に、「政策」などのように、認知的要求の高い用語が必要とされることから、帰国生には比較的難しいとされている。そのため、英語（獲得言語）で授業を行うことが、生徒の言語的な負担を軽減し、教科内容を理解するのに役立つと考えた。また、生徒の海外での経験や知識といった生徒自身の多様性が、地理という授業自体の内容を深めるのに貢献できる。さらに滞在国の文化、生活について話してもらう活動を授業に取り入れることで、生徒のバイカルチュラルのサポートにも有効である。留学生を含む授業実施側にとって、地理は教科書の知識だけに依存することなく、自らの文化や経験を反映したシラバスを組むことができ、その際、大学に在籍する留学生、ALTの方など周りのリソースを活かすことができる。

(4) 先行学習

(1)で述べたように、学習言語や学校で学んできた様々な概念は獲得言語である英語で形成されており、日本語にまだ置き換えられていないものも存在する。日本語地理の授業を理解するためには教科書などの各種教材を理解することが必要だが、その際、漢字が分からなかったり、言葉の意味が理解できないため、内容の理解が困難なことがありうる。そこで、生徒にとって強い言語である英語で先行的に学ぶことにより、教科を学ぶ前に存在

する言語の厚い壁をなくし、学習内容の理解を助けることができる。そして、弱い言語である日本語を加算的に伸ばすことによって、生徒の認知面および精神面での負担を軽減させる方法をとることにした。

(5) グループ学習とティームティーチング

授業は3つのグループに分け、グループ活動に主体においた。各グループには、英語のほうが地理の概念が分かりやすい生徒、英語は理解できるが概念理解は日本語のほうがよい生徒、英語がそれほど理解できず日本語でしか理解できない生徒が存在した。そのため、各グループに、英語で教えるET（English teacher）1人と日本語で生徒を補助するJT（Japanese Teacher）1人が入り、ティームティーチング体制で授業を行った。さらに、英語科教員が全体観察・把握をしながら机間巡回を行い、2段構えのT・T体制にした。各グループは、ETが中心となり授業を進め、JTは英語のよく理解できない生徒に単語レベルで置き換えたり、ETの指示が理解できないときに日本語で指示を与えたりした。

4．成果と今後の課題

帰国子女教育学級の多くの生徒にとって強い言語である英語により教科先行学習を行ってきたことは、言語保持の面では意義があったと思える。時間の経過と共に生徒の言語は日本語にシフトしていっており、今まで身につけてきたものは急速に失われていく可能性がある。そのような中で、英語そのものを「目的」とするのではなく、「手段」として学習を進めたことは、自然な形での英語運用の機会を増やすという点で効果的であったと思われる。世界地理の内容をテーマにして、ディスカッションすることは、彼らの英語力の保持・伸長に役立ち、「学習言語」の確立へ繋がることが予測できる。また、地理に対する興味・関心を高めることができたと感じられる。しかし、週1時間という限られた時間で、しかも1つの教科だけを扱うことで、言語伸長の成果を具体的に確証することはできなかった。また、当然のことながら、英語を強い言語としない生徒へのサポートは難しく、先行学習が有効かどうか判断できない部分があった。

さらに、プロジェクトの側からのバイカルチュラルな働きかけを意識的且つ積極的に行ってきたにもかかわらず、生徒側の意識の変化を受け止める手段が明確でなかったこともあり、生徒の変容ぶりや意識変化が確認できていない。これまで、附属中学校の帰国子女教育学級の生徒の多くは米国からの帰国生であり、米国を最上とし、次にヨーロッパ、さらに、アジアとするようなヒエラルキー傾向があり、このことをなかなか崩すことができないという悩みもある。また、生徒の側が持っているバイカルチュラルなリソースを有効に生かすことも今後の課題である。

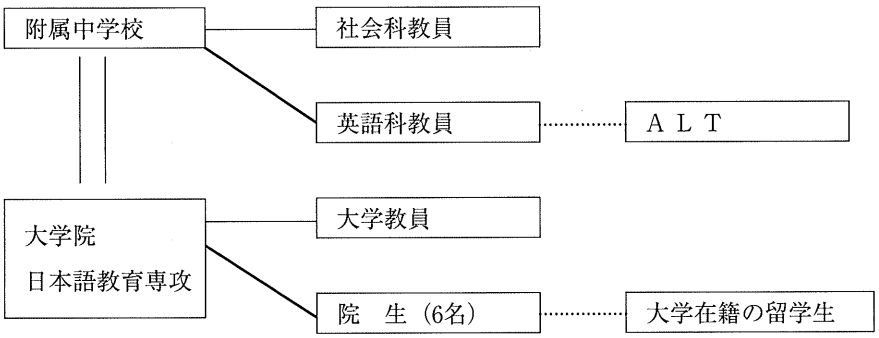
今回、中学校と大学が連携して、大学院生を始めとする様々な人たちの人的リソースとパワーを活かしながら、研究理論を背景として教育実践が行えたことは最大の成果である。中学校の社会科にとっても、英語科にとっても、生徒の興味・関心を高めるだけではなく、自由にディスカッションできる場を設けることの大切さを感じた。同時に、今回のような試みを継続・発展させて行くために、多様な言語や文化を持った人的リソースをどこに求め、どのように確保していくかが今後の最大の課題になると思われる。

［注］

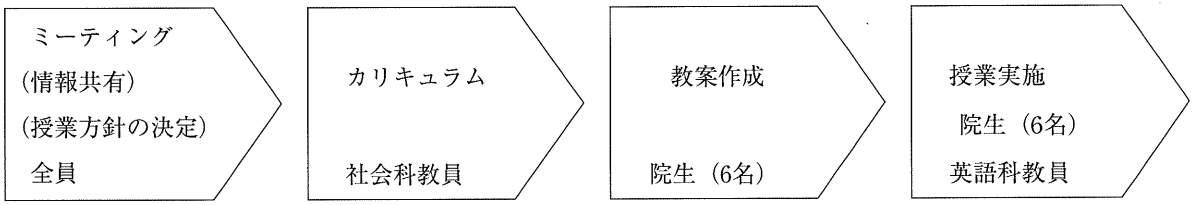
これは、「平成12年度教育改善推進費（学長裁量経費）、研究課題『バイリンガル教育を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援―実施とその評価』」に基づく、お茶の水大学附属中学校と大学との連携による共同研究である。

資料１　附属中学校・大学院の組織図

＜ネットワークマップ＞



＜ネットワーク機能＞



資料２　カリキュラム

プロジェクト英語の授業（１時間）		対応する社会科の授業（２時間）
６／８	インタビュー＆オリエンテーション	＜寒い地域の人々の生活＞ ・冷帯・寒帯（VTR 極北の民チュクチ族）
６／15	＜熱帯雨林とその生活＞	・寒い地域の生活の工夫 ＜熱帯の人々の生活＞ ・熱帯の分布、生活（VTR 太平洋の島の生活）
６／22	＜熱帯雨林の環境破壊＞ 熱帯雨林の破壊の原因を考える	＜熱帯の人々の生活＞ ・熱帯雨林とサバナ（VTR 熱帯林・サバナ） ・熱帯林破壊の原因
７／６	＜中東地域の生活＞ 石油の豊富な国の人々の生活の写真	＜乾燥した地域の生活＞ ・砂漠、オアシスの生活（VTR 西アジアのくらし） ・ステップの生活　移動式住居　遊牧
		＜自分の住んでいた国・地域の人々の生活＞ ・夏休みにまとめたレポートを発表する。 ＜高山地域＞＜世界の宗教＞
10／18	英・社合同授業についてのインタビュー	
10／26	＜アメリカを知る＞ ・地図：アメリカの州（州名クイズ） ・ニューヨークの移民（ALT のお話） ・都市「メトロポリス」「メガロポリス」	・世界の宗教と人々の生活 ＜アメリカについて調べてみよう＞ ・テーマごとのグループ分け
11／１	＜アメリカの移民＞ ・多民族国家であることの長所・短所（討議）	＜調べ学習＞ ・図書室で調べる　資料の収集
11／８	＜アメリカの多文化社会＞ ・TAPE：アメリカの音楽（ジャンルクイズ） ・ジャズについて（英語科教諭のお話） ・「メルティングポット」「サラダボール」	＜調べ学習＞ ・図書室で調べる　発表の準備 プリント、OHP シート、模造紙にまとめる

11／15	＜アメリカの都市＞ ・VTR：アメリカの都市（都市名クイズ） ・アメリカの政治（VTR：大統領選討論） アメリカとカナダを比較（ALT のお話）	＜アメリカについて発表しよう＞ ・アメリカの自然 ・アメリカの都市 ・アメリカの農業
11／22	＜アジアについて知る＞ ・アジアの国々（地図で国名を調べる） ・アジアの人々（ALT のお話）ベトナム・タイ・香港	＜アメリカについて発表＞ ・アメリカの民族 ・アメリカの交通　　・アメリカの工業 ・アメリカと日本の関係
12／6	＜中国の人口＞ ・人口の多い国（クイズ） ・人口問題　人口が多い長所・短所を討論 ・中国とインドの比較（留学生のお話）	＜アジアの自然＞ ・アジアの地域区分 ・アジアの自然 ・人口の多い国　中国（VTR 一人っ子政策）
12／13	＜共産主義＞ ・中国の農業の特色　　中国料理 ・共産主義の政策 ブルガリアの共産主義時代（留学生のお話）	＜中国の農業＞ ・農業と気候分布の関係 ・集団農業から生産責任制へ（VTR 農村の変容）
1／7	＜インド＞ ・インドのイメージ ・インドの自然、食べ物 ・日本のイメージ	＜経済特区＞ ・香港の返還、経済の近代化（VTR：香港返還） ＜東南アジアの国々＞ ・位置と国名・首都
		東南アジアの資料を読みとる課題学習 （特別時間割　OWN　3時間） マレーシア日本人学校　教員の話し
1／31	＜アジアの国々＞ ・「ASEAN」 ・日本とアジアの国々（ゲスト・討論）	＜東南アジア経済発展＞ ・「ASEAN」「NIES」 日本企業の進出　マレーシアの工業化 農村と都市（VTR　出稼ぎする少女）

福田　正恒（ふくだ　まさつね）
早稲田大学卒業、川崎市立中学校教諭を経て、現在お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学で英語科教育法担当。論文に「アメリカ公教育のいま」（川崎市総合教育センター、1990）。「英語の運用力を高める言語活動」（『川崎市総合教育センター紀要』No.3　1990）。「個に応じる英語科コース別分割授業」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第29集』、1999）

木村　真冬（きむら　まふゆ）
1963年生。お茶の水女子大学文教育学部卒。お茶の水女子大学附属中学校社会科教諭。論文に「帰国子女教育学級におけるティームティーチングの導入と指導方法の工夫」（共著　お茶の水女子大学附属中学校紀要、1996年）など。

オーリ・リチャ（Ohri, Richa）
ネルー大学日本語・日本文化卒業。お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース２年在籍。専門は日本語教育。論文に「バイリンガル育成を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援－実施とその評価－」（共著、H12教育改善推進費（学長裁量経費）研究　研究成果報告書、2001）。「帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み－中学校英語科・社会科・日本語教育コース院生・外国人院生のティームティーチングによる支援」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第30集』、2000）

櫻井　陽子（さくらい　ようこ）
お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース２年在籍。専門は日本語教育。論文に「バイリンガル育成を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援－実施とその評価－」（共著、H12教育改善推進費（学長裁量経費）研究　研究成果報告書、2001）。「帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み－中学校英語科・社会科・日本語教育コース院生・外国人院生のティームティーチングによる支援」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第30集』、2000）

古市　由美子（ふるいち　ゆみこ）
お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース２年在籍。専門は日本語教育。論文に「バイリンガル育成を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援－実施とその評価－」（共著、H12教育改善推進費（学長裁量経費）研究　研究成果報告書、2001）。「帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み－中学校英語科・社会科・日本語教育コース院生・外国人院生のティームティーチングによる支援」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第30集』、2000）

マグダレナ・ヴァシレヴァ（Magdalena Vassileva）
ヴェリコ・タルノヴォ大学（ブルガリア）、応用言語学専攻（英語・日本語）修士取得。お茶の水女子大学博士前期課程言語文化専攻日本語教育コース２年在籍。専門は日本語教育。
論文に「バイリンガル育成を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援－実施とその評価－」（共著、H12教育改善推進費（学長裁量経費）研究　研究成果報告書、2001）。「帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み－中学校英語科・社会科・日本語教育コース院生・外国人院生のティームティーチングによる支援」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第30集』、2000）

守谷　智美（もりや　ともみ）
お茶の水女子大学博士後期課程人間文化研究科国際日本学専攻在籍。専門は日本語教育。論文に「バイリンガル育成を目指した中・高・大、日本人院生、外国人院生のティームティーチングによる支援－実施とその評価－」（共著、H12教育改善推進費（学長裁量経費）研究　研究成果報告書、2001）。「帰国子女教育学級における加算的二言語併用授業の試み－中学校英語科・社会科・日本語教育コース院生・外国人院生のティームティーチングによる支援」（お茶の水女子大学附属中学校『研究紀要第30集』、2000）